展望

産官学連携による 新技術開発

蓮覚寺聖一

コンピュータのめざましい発展と普及はITテクノロジーによるグローバル化を押し進め、工業製品は世界規模でその性能と価格を競うことになった。日本経済は高い労働コストの産業分野での国際競争力を低下させ、国内産業の空洞化が進行しつつある。これにともなう生産拠点の後開発国への移転は必然的に技術移転を促し、国内の生産技術者や労働者の就労人口を低下させている。この流れは後開発国の所得水準を押し上げ、市場を拡大させる効果を生むので国内産業が国際競争力のある商品を開発すれば旧来にまして活性化する事が期待できる。すなわち、バイオ、ナノテクノロジーなどの最先端分野ばかりでなく差別化製品やブランド品を生み出す創製技術が求められる。このような時代背景から産業界は危機意識も高く、存立をかけて構造改革を行ないつつあり、21世紀の企業像を描こうとしている。また、経済産業省は最先端分野での技術開発や地球規模での環境保護対策技術など技術立国としての将来像の一つを産官学連携による新技術開発によって達成しようと様々な助成策を施行している。

特に、大学に眠る知的財産の活用を図るための法整備もなされてきた。このような産業構造改革や活性化対策に大学教官がどの程度の意識を持っているかが問題であるが少なくとも実学としての工学系に関わる者はエジソンとアインシュタインを同等に評価すべきである。とかく応用より基礎の方が学問的に上位にあるなどと思う象牙の塔のような思想は捨て去るべきである。時代は確実に変革を迫り、これに対応できなければ淘汰されるだけである。あたかも自然界での淘汰が環境に対する順応性で決まるように。

電気化学会での研究発表の多くが今日要求されている技術開発に関連しているのは喜ばしいことである。なぜなら学問としての電気化学は生化学からセンサー、太陽光発電、燃料電池など広い応用分野で不可欠であり、材料評価技術や分析技術など広い範囲で利用でき、特に境界領域を扱うのに適しているからである。ずいぶん古い話になるが電気化学工業は石油ショックによって引き起こされた電力料金の高騰によって斜陽化し、気の早い人は学問としての電気化学の重要性を疑ったが、現在はガスセンサー、バイオセンサー、光触媒、燃料電池などの講演が新たに加わって盛況で、以前にもまして大切な学問領域である事を実証している。産官学連携による新技術開発が多くの分野で押し進められる中で電気化学が果たす役割は増加し、21世紀の産業に貢献する事は明白である。我が国の現状に危機意識を持ち、新技術開発に熱意を持つ多くの研究者が本会で活躍されることを期待します。

Seiichi RENGAKUJI
平成 15, 16 年度北陸支部長、
理事
富山大学工学部教授